

Sumter

ヘディン探検紀行全集2 (全15巻・別巻2)
アジアの砂漠を越えて (上)

定価一七〇〇円

訳者略歴

一九一八年生
一九四二年上智大独文科卒

上智大教授

主要訳書

ハラール「白い蜘蛛」

ブルール「八千米の上と下」

ディッツァー「チョー・オユー」

エグラー「雲表に聳ゆる峯々」

クリーア「大岩壁」

ヘーク「登山靴とスキー」

フッター「ウェーデルン」

訳者

◎ 横川 文雄
よしかわ ぶみ お

発行者

中 森 季 雄

印刷者

山 岸 真 純

発行所

株式会社 白水社

東京都千代田区神田小川町三の二四

電話東京(廻)七八一一(代)
振替 東京九一三三二二八

郵便番号一〇一

三秀舎印刷・加瀬製本

(分) 0325 (製) 44520 (出) 6911

ヘイン探検紀行全集
2

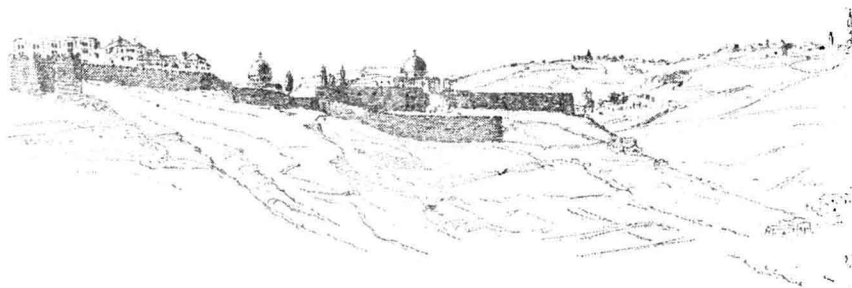
アジアの砂漠を越えて（上）

深く敬愛する恩師、枢密顧問官
ドクトル・フェルディナント・フライヘル・フォン・リヒトホルフェン教授に
心からの尊敬と感謝をこめて
捧ぐ

Sven Hedin
Durch Asiens Wüsten
Leipzig/F. A. Brockhaus/1910

ヘディン
探検紀行全集 2

アジアの砂漠を越えて (上)



監修 深田久弥
榎 一雄
長沢和俊
訳 横川文雄
協力 北村 甫

白水社

アジアの砂漠を越えて(上) ■ 目次

序言 9

- 1 世界の屋根をめざして 15
- 2 冬のパミールを越えて 27
- 3 パミール・ポストの地理学上の概観 49
- 4 氷の山の父をめざして 60
- 5 カシユガルの思い出 77
- 6 ムス・ター・アタのキルギス人とともに 88
- 7 小カラ・クルの旅 108
- 8 ムス・ター・アタの氷河で 118
- 9 氷の山の父 125
- 10 月明りの夜を六三〇〇メートルの高所で 140
- 11 第二回パミール横断 149
- 12 小カラ・クルでの帆走と水深測量 158

13 キルギス人の生活、再びカシユガルへ 166

14 砂漠に向かう 176

15 巡礼 189

16 砂漠の入口で 202

17 この世の楽園 218

18 墓場の静けさの故郷 227

19 水がない！ 241

20 キャラバンの破滅 252

21 助かった！ 266

22 イスラム・バイの救出 285

23 砂漠からの帰還 299

解説（長沢和俊） 311

序言

今回公にする本書が意図するところは、わたしが一八九三年から一八九七年にかけて行なったアジア旅行の概要をのべることである。一般の読者を対象にしたもので、ただ旅行の経過と、その重要な体験の一部を述べたものに過ぎない。

わたしが旅行を数段階に分けて行なったのは、よい考えだったと思う。一つの旅を終えるたびに、つらい旅の疲れを癒し、次のたたかいに必要な力を貯えることができた。集計した成果を一時的にはあるが整理して、次の旅でわたしを待ちうけている仕事のために備えることができた。それでわたしは、そのつど、新しい興味と新しい視野をもってでかけることができたのである。

最後の瞬間になって、わたしはひとりで旅に出ることに決めた。このほうが、自分の手持ちの資金で準備しや

すかったこともあるが、わたし自身は我慢できるかもしれないが、他の同行者だったら命まで賭けたくないような危険や艱難に遭遇した場合、かえってひとりのほうが行動も自由だと思ったからである。

わたしが主として従事した科学的な仕事について、ここではただ列挙するだけにとどめよう。科学的な仕事とは、バミールの東南辺の山地及びコンロン（崑崙）山脈を通じて行なった地質学側面図の測量、若干のキルギス人の人類学上の測定、各季節の遊牧民の移住研究、地名の語源調査、われわれが通過した各河川の水量測定、各湖水の水深測定、植物の採集、とくに、バミールとチベットの高峻山岳地帯にある藻の採集、一日三回の気象観測日誌、ゴビ砂漠の特徴と、タリム河の水系の地理学的範囲に関する膨大な資料の収集、以上である。わたしは、タリム河の特徴を、バミールやチベットの高地で、いくつもの全く異なった地点から、そのはるかに遠い末端であるロブ・ノールまで、調査観察する機会に恵まれた。その結果、夏になると河床にはおびただしい水量が

流れ込むが、冬になればこの水量も著しく減って、あるかないかの細流になってしまふし、また、この現象は、ちやうど血液が血管のなかを脈うって流れるのと同じ規則正しきで年々繰り返されることがわかったのである。

旅行誌の正確を期するためにわたしが行なった天体観測は、一七か所で行なった緯度と時間との測定のことである。

地形学的測量には、ロシヤ領バミールのすでに知られていた地域を通り過ぎたあとで、一八九四年の夏に着手した。照準儀、測量用平板、歩測器を使って小カラ・クル周辺の地域を測量したが、ここを起点にして、わたしはムス・ター・アタの氷河の地図作製のための測量を行なったのである。

次にわたしは、自分が一八九四年、一八九五年、一八九六年及び一八九七年の初めに踏破したルートは、これをすべて測量した。一日として、この重要な仕事をなおざりにすることはなかった。一八九七年の三月二日に、ベキン（北京）について五五二枚目の地図を書き終えたとき、アジアを通るこのながい曲がりくねった線はやつ

と終点に達するのだが、この線にはただのいか所も中断されたところはないのだ。

旅を続けながら地図に記したルートの長さは、一万四九八キロに及ぶが、これは、カイロとケーフタウン間の距離の一倍半、つまり地球の周囲の四分の一にあたる。これに、わたしがアジアですでに開けた地域を自動車、あるいは汽車で進んだ一万三〇〇〇キロを加えると、旅の全行程は二万三〇〇〇キロ以上となり、これは北極から南極までの距離よりも長いことになる。これとはべつに、キャラバンによる全行程中、毎時平均四キロ半踏破したことになる。

測量した一万四九八キロのうち、三二五〇キロは、このときまでまったく知られていない地域を通るルートだった。しかし、わたしが、二人目、三人目、あるいは精精四人目に通った、あとの七二四八キロにしても、決してつまらないルートではなかったのである。というのも、わたしはチャガタイ・トルコ語がしゃべれたので、たいいていの場合、あまり信用のおけない通訳を頼りにしなくてもよかったから、以前訪れたことのある土地では自分で色々重要な情報を入力することができたし、その

ほか、それまでどんな地図にも載っていなかった地名をかなりたくさん自分の地図に書きこむことができた。

また、これは興味あることと思われるので、ついでに記しておくが、五五二枚の地図上に旅行中記したルート
の長さは、一一メートルに達している。しかも、これに、ムス・ター・アタ氷河の地図に記載したルートは勘定に入っていないのだ！

旅費は、はじめ三万三〇〇〇マルクと見積られていた。この費用の調達は、国王陛下の厚い庇護と多額な寄付のおかげで、そんなにむずかしいものではなかった。費用の半分以上が国王をはじめノーベル家及びゴーテンブルク家のメュセナス（学芸の保護者）によって寄付された。わたしはここに、すべての人たちに心からの感謝を捧げる次第である。

しかし、わたしは北京に着いたとき四四〇〇マルク借りなければならなかったから、旅費の総額は、器材装備の費用も含めて三万七四〇〇マルクになった。

ストックホルムを立ったとき、わたしの荷物はそれほど大きいものではなかった。というのも、かさばる装備はアジアの土地に行ってから初めて調達されたからであ

る。持っていた器具は次のようなものである。環像プリズム（円形プリズムを備えた環像望遠鏡）一個、携帶用時計二個、アネロイド気圧計三個、寒暖計多数、その他の氣象観測器具（このなかには日照寒暖計、乾湿計、接水寒暖計、最高最低寒暖計、三個の温度計をそなえた測高計一個も含まれていた）。さらに、三脚のついた測量用平板と照準儀が地図測量のために用意された。それから、羅針儀、乾板、フィルム、現像用の化学薬品その他の付属品一式を含むカメラ二台、普通の時計二個、双眼鏡一個、アルミニウム製の小型望遠鏡一台、眼鏡及びサングラス約一〇〇個、そして最後に、地質調査用ハンマー、巻尺、絵具箱、スケッチ用具、スケッチブックとノート多数等々が用意された。

全行程を通じて、武器としては小銃 三、スウェーデン製の将校用ピストル 一、他の型のピストル 六、及び弾薬二箱が携行された。

図書は、もちろんこれができるだけ少数にとどめたので、蔵書内容は、重要な科学上の参考図書数冊、最近の数十年間に出たアジア奥地の旅行記の完全な集書、バミール、ゴビ砂漠及びチベットのロシアとイギリスの略

図、それに聖書だった。――

わたしの行なった旅にも、わたしの本にも、大きな欠陥があることはよくわかっているし、また、持ち帰った收穫はもっと強力な、もっと精通した人の手に委ねて、より高度に、黄金の穂を実らせるべきだとは思いますが、それでもわたしは、自分の乏しい力で、ともかくベストをつくすことができたことで満足し、また感謝している。

最後に一言、本書の装釘について。二葉の大きな地図は、H・ビストレーム少尉の監修のもとにストックホルムの参謀本部印刷局で作られたもので、主としてカーゾンのバミール地図とビエツォフの中央アジア地図をもとにしているが、この二つの地図に新しく発見したものが記入されているのである。この地図は、旅行について概観を得るためのものであって、厳密な精確さを要求するものではない。

非常に興味のある独特の場面を、いっそう生き生きとさせるために、本書をかなり多くの図版で飾ることがで

きたが、これはスウェーデンの芸術家の手を煩わしたものである。これらの図版は決して空想の所産ではない。どの図版のためにも、わたしはスケッチや写真の資料をたくさん持っている。資料がないものは、詳細な説明を画工に渡した。いずれにしても、一つ一つの図版作製にあたって、わたしが監修することにしたのである。

とくに喜びに堪えないのは、ここで公に、ベルリン地理学協会に対して、一八九七年の一月六日、わたしに与えられた名誉ある歓迎に、深い謝意を表明する機会を持ち得たことである。従って、わたしが同協会の会長をしておられる枢密顧問官ドクトル・フライヘル・フォン・リヒトホルフェン教授の力強い指導のもとに、ベルリン大学で地理学の研究ができたことをなよりの榮譽と考えている。

さらに、わたしにとってなつかしい思い出として忘れることのできないものは、ウィーン、ライプツィヒ、フランクフルト・アム・マイン、ハンブルク、ハレ・アン・デア・ザーレ、シュトラースブルク・イン・エルザス、ギーセンの地理学協会及びダンツィヒの自然科学協会であって、わたしはこれらの各地できわめて丁寧に迎

えられたのである。わたしがドクトル・アルフレッド・キルヒホフ教授のもとにハレ・アン・デア・ザール大学で学んだのは、遺憾ながらきわめて短期間だったが、ドイツにつながるわたしの最も美しい思い出の一つである。

わたしは、自分が教えを受けた諸先生、地理学協会の会長及び会員諸氏、幾多の高名な旅行家や探検家を輩出したリヒトホーフエン教室の同級生諸君、とくに、どんな犠牲もあえて辞さないで、本書のために立派な装釘を考えてくださった優れた出版者F・A・ブロックハウス氏——一言でいえば、ドイツとオーストリアで幸福を共にすることができたすべての人と知り合い、まるで友人として遇されたので、わたしがドイツとオーストリアに特別の愛着を持つことがわかっていただけるだろう。どうか、この長い遍歴時代の叙述にも、変わらぬ理解をあらえて期待する次第である。

ストックホルム、一八九九年五月

ドクトル・スウェン・ヘディン

1 世界の屋根をめざして

われわれは、地理学上の発見の歴史のなかで一つの新しい時代を迎えようとしている。ここでは、バイオニアたちが果たしてきた役割はまもなく終りを告げて、大陸の地図の上からは空白地帯がだんだんと少なくなっていくのである。かつてバイオニアたちは、幾多の危険と困難を伴う絶え間のない戦いを行ない道を切り開いてきたのであって、彼らはこれを大胆な筆致で報告しているが、新しい世紀の探検旅行者たちは、その地域にいまやどんどん入り込んでゆき、この地上のいたるところで休むことなく生き生きと鼓動する生活を詳細に調べる時代になってきたのである。この探検家たちは、うずめなければならぬ新しい間隙をつねに見出すだろうし、解決しなければならぬ無数の問題にも出会うだろう。

とくに長いこと人々から打ち捨てられてきたのは、ア

ジア最奥の地である。近づくことがきわめて困難なゴビ砂漠の広大な土地、チベット高原の果てしない広がり、いまでも北極や南極と同じようにほとんど知られていないのである。

ところで、もしわたしがここで、アジア奥地でいままおその解決が待たれている余りにも大きな問題について報告しようと考えらるならば、それは余りにも大きな仕事になるだろう。新しい山脈や湖水や河川の発見、アジアを通して行なわれた諸民族の移動を明らかにすることのできる古代の文化と遺物や遺跡の発見、古代の、しかし、いまだでは見捨てられてしまった隊商路の再確認、そして最後にまったく未知の地域の地図作製。こういったすべてのものが、抗し難い力をもって探検家をこのはるかな遠い国へと引きつけてやまないものである。

アーリア系の諸民族が、この声を上げたところ、またその暗い内奥から出て来た蒙古族が、近東アジア全域とヨーロッパの一部を席巻したところ。この地域を通して行なう旅は、探検旅行家の果たすべき最も大きな仕事の